

2022年3月20日～3月26日 各家庭でのディボーション用テキスト

かくして朝になると皆起きて、また少し話をした後、ここの珍しいものを見せてしまうまでは出発しないようにと彼に言った。まず彼を書斎に入れて、最古の記録を見せたが、私が夢の中で記憶している所では、その中でまず第一に丘の主の系図を見せた。すなわち、彼は「日の老いたる者」の子であって、【ダニ7:9】永遠の昔からの系図で世に来た者であった。ここにはまた彼のなされた行為と、召して使われた何百人もの名前と、また長い年月日にも自然の腐朽にもくずれることのない住処に彼らを住ませた次第とが、一層詳しく記録されてあった。

それから彼らは主の僕たちのある者がなした立派な行為を幾つか彼に読んで聞かせた。例えば、彼らが国々を征服し、義を行ない、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせたというようなことであつた。【ヘブ11:33-34】

次に、彼はまたこの家の記録の他の部分を読んだが、そこには主のみ体とみ業に対して過去に大きな侮辱を加えたどんな者でも喜んで恵みのうちに入れられたことが示されていた。ここにはまたその他多くの有名な事の歴史があつて基督者はそれを全部見た。例えば昔や今の事柄と、確かに成就さるべき事の預言と予報とであつて、それは敵にとっては恐れと驚きであり、巡礼者にとっては安らぎと慰めであつた。

翌日彼らは彼を武器庫に案内し、そこで主が巡礼者に備えられたあらゆる種類の武器、例えば、剣、楯、かぶと、胸当、さまざまの祈り、破れぬ靴を見せた。ここにはこうしたものが、天の星のように数多い主に仕える人々を武装させるに十分あつた。

彼らはまた主のしもべのある者が不思議な働きをしたときの武器を幾つか見せた。すなわち、モーセの杖、ヤエルがシセラを殺したときの槌と釘、ギデオンの軍勢を敗走させたときのつぼとラッパとたいまつであつた。次に見せたものは、シャムガルが六百人を打ち殺したときの牛のむちであつた。またサムソンがあつた偉い手柄をたてたときのあご骨を見せた。さらにまたダビデがガテのゴリアテを殺したときの石投げと石、主が「立って獲物をする日」に罪の人を殺される剣を見せた。そのほか多くの立派な物を見せられて、基督者は大いに喜んだ。これが終わると、彼らはまた寝についた。

それから私は夢で見ていると、翌朝彼は起きて先に進もうとしたが、彼らはさらに翌日まで滞在することを望んだ。彼らは言った、もしお天気がよければ愉快が丘にご案内しましょう。それはあなたの慰めを一段と増すことでしょう。現においでになるここよりは一層望みの港に近いからです。そこで彼は承知して滞在することにした。夜が明けると、彼らはその家の屋上に案内して、南方をご覧なさいと言っ

た。そのとおりすると、見よ、はるか彼方に、実に気持のよい山岳地方が見えた。それは森林、ぶどう園、さまざまの果物で麗しく飾られ、花や泉や噴水もあって、見るも楽しい所であった。その地方の名を尋ねると、インマヌエルの地と言って、この丘と同じくすべての巡礼者のためのものだとのことであった。ここからそこへ行くと天の都の門が見えるでしょう、そこに住んでいる羊飼たちが指し示しますから、とも言った。

さて、彼は出かけようと思い、人々も同意した。しかし、まずもう一度武器庫に入りましょうと言って、入ると、彼らは頭の天辺から足の爪先まで堅牢な武具で彼を装わせた。万一途中で攻撃されるといけないからであった。このように武装して友人と共に門の方に出て、だれか巡礼者が通るのを見かけはしないかと門衛に尋ねた。すると見かけましたよと答えた。

基督者 ご存じの方ですか。

門衛 名を尋ねましたら、信仰者と答えましたよ。

基督者 ああ、その人なら知っています。私の町の人で、ごく近所の人です。私が生まれた土地の出です。どのくらい先に行っているでしょう。

門衛 今ごろは丘の下に行っていましょう。

基督者 では門衛さん、主があなたと共におられて、あなたが私にして下さったご親切に対して、祝福をいや増し加えられますように祈ります。

それから彼は出かけた。ところが聡子と敬子と愛子と慎子は丘のふもとまで見送るといので、前の話を繰り返しながらいっしょに進んで行き、丘を下った。

そのとき基督者は言った、登ってくるのが困難であったように、下って行くのも（私の見るところでは）、危険ですね。慎子は言った、はい、そのとおりです。あなたが今なさっているように、人が屈辱の谷へ下って行って、途中少しも滑らないということはむずかしいことです。彼らは言った、ですから私たちはあなたといっしょに丘を下るために出て来たのです。かくて彼は下り始めたが、非常に用心していた。それでも一、二度は滑った。

それから私が夢で見ていると、この善い道連れたちは（基督者が丘のふもとに着いたとき）一塊のパンと一びんのぶどう酒と一房の乾ぶどうを彼に与えた。【Ⅱサム 16:1】 こうして彼は進んで行ったのである。

さて、この屈辱の谷で、気の毒にも基督者はひどい目にあつた。彼がほんの暫く行ったかと思うと、一人の悪魔が野を越えて彼に会いに来るのを認めたのである。その名はアポロン（破壊者）と言った。そのとき基督者は恐ろしくなってきた、引き返そうか、それとも踏み止まろうかと思案し始めた。しかし再び考えてみると、彼は背中によろいを着ていないので、相手に後を見せようものなら、投げ槍で手もなく突き通すのに一層の便宜を与えるかもしれないと思った。そこで彼は思いきって踏み止まろうと決心した。自分の命を救うことしか眼中にないとしたら、踏み止まるのが最善の道だと考えたからである。

【ジョン・バニヤン 天路歷程 正篇 より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい